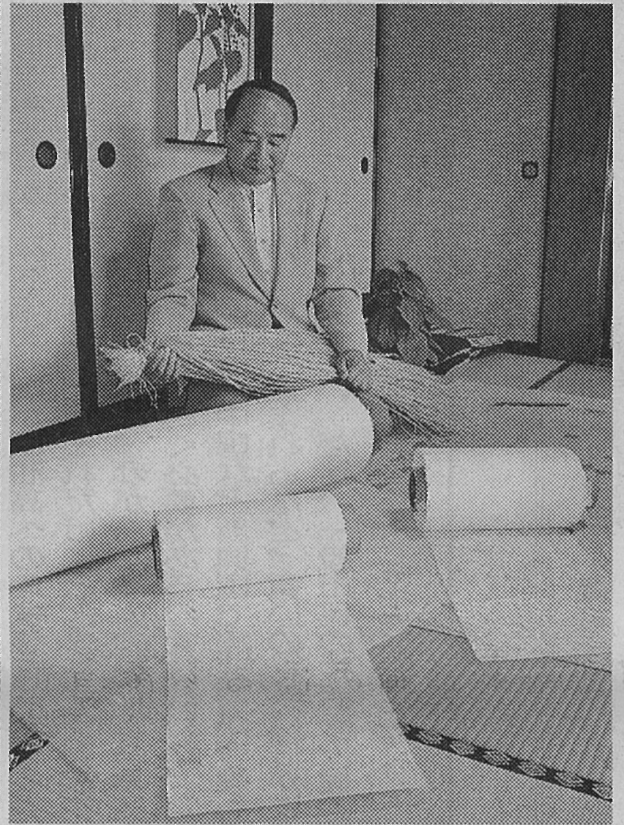


カラムシ製の良い風合繊維だらん



カラムシ製の紙開発 十日町の業者

イラクサ科の多年草・カラムシの繊維製品を企画販売する「ネオ昭和」（十日町市）はこのほど、今夏から本格製造を始め、独自のブランドとして商品化を目指す。

カラムシ製の紙を県外の業者と共同で開発した。県内産の原料を使用し、独自のブランドとして商品化を目指す。

独特の風合いと保存性の高さを生かし、新潟の専門家の助言をききかけに製造に着手。東京

カラムシ製の紙と、紙の原料となるカラムシの茎の繊維を持つ村山社長
十日町市伊達

カラムシの茎から採れる布地用繊維は通気性が良く、虫が付きにくいなどの特徴があり、夏用着物地の越後上布や小千谷縮などに使用されてきた。一方、同繊維は非常に長く、絡まり合うため、紙製造は行われてこなかったという。

同社は二〇〇七年秋、紙の専門家の助言をききかけに製造に着手。東京

の紡績会社を頼ってカラムシを綿状に加工し、土佐和紙で知られる高知県の業者に紙の製造を委託した。

完成した紙は向こう側が透けて見えるほど薄いものから、障子紙程度の厚さまで三種類。いずれも表面に繊維が絡んでできた模様が浮き出て、和紙のような風合いに仕上がった。印刷も可能で厚さも変えられるという。県内の山などに群生するカラムシを使用。名刺や日本酒のラベル、インテリアの材料として商品化を検討している。

同社の村山好明社長（五八）はカラムシの茶や釉薬などの開発も手掛けており、「越後のカラムシ」をブランドとして全国に広めていきたい」と話す。

問い合わせは同社、025(750)28957。